

## 令和4年度 府立北稜高等学校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (実施段階)

学校経営方針 (中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
<p>本校の教育テーマ「国際教育」「環境教育」「表現活動」を相互に関連づけて推進し、グローバルな視野と主体的に生きる力を有する生徒を育成する</p>	<p>(1) 北稜の魅力伸長                      ・本校の教育の柱の一つである「環境教育」では、第1学年生徒を対象とした表現活動での取組等、全体化に成功した。また、KESステップ1の更新に生徒環境委員会も関わる等、生徒の活動への参画を進めることができた。                      ・「国際教育」については、オンラインの交流等、コロナ禍の国際交流を進めることができた。今後は、ハイブリッドな国際交流の形態を研究することにより、コロナ以前よりも豊かで多様な国際交流を目指したい。また、重要な国際交流の手段としての語学力の育成について力を入れたい。                      ・生徒会活動や、総合的な探究の時間、部活動を中心に、地域活性化への生徒参画を進めることができた。今後は、より全校的な取組とすることが課題である。                      ・コロナ禍での制限はあったが、生徒会や生徒委員会が主体性を発揮し、学校行事を活性化することができた。今後はアフターコロナの新しい学校行事を、生徒起点で作り上げていきたい。                      ・部活動では、体育系、文化系ともに生徒にとって充実感のある取組が展開でき、成果も上がっている。今後も、多様な生徒がそれぞれの力を発揮し、活躍できる場としての機能を充実させていきたい。</p> <p>(2) 北稜学習改革                      ・電子黒板の活用方法の研修、BYODの研究、学習プラットフォームの活用等、学びのICT化について組織的に進めることができた。今後はこれらの成果を、本校としての「主体的・対話的で深い学び」「個別最適化した学び」「協働的な学び」の構築につなげていきたい。                      ・本校の強みである丁寧な進路指導を一層進めることができた。一方で、生徒・保護者に対する体系的な情報提供力には課題が残った。ICTを活用しながら、よりタイムリーな情報提供を進めていきたい。                      ・大学入試システムの変化と進路希望の多様化への対応を進めてきた。今後も、従来の進路指導の概念を超えた新しい指導のあり方を考えていく必要がある。</p> <p>(3) 北稜の魅力発信                      ・各種広報媒体の見直しやSNSの活用を進め、本校の魅力を中学生起点で効果的に発信することができた。今後は、本校の強みである、中学生の多様なニーズに対応できる豊かな特色を持つ教育活動について、より具体的に発信していきたい。</p> <p>(4) 北稜教職員体制                      ・北稜魅力推進プロジェクトチームを立ち上げ、生徒、地域(中学生)、教職員にとって魅力ある学校創りに向けてさまざまな提案をすることができた。特に、「地域の課題解決力の育成」を切り口に学校としての力をつけていくという提案については、年度を越えて継続的に取り組んでいきたい。                      ・学校ICT化として、校務と学びのICT化を進めることができた。今後は、校内体制を整え、より安定した学校ICT化を目指したい。</p>	<p>(1) 北稜の魅力伸長                      ・教育の柱である「国際教育」「環境教育」「表現活動」が、「生徒起点」で、より充実感のあるものとなるように見直しを進める。                      「国際教育」については、「ハイブリッドな国際交流」の充実と「北稜ならではの語学育成法の構築」を行う。                      「環境教育」については、KES認定20年の節目の年を迎えることから、次の10年を見通した計画策定を行う。特に、生徒の環境問題について行動が、個を超えて社会や世界につながり、よりよい世界を創造する行動となることを目指した教育体系を作りあげる。                      「表現活動」については、「コミュニケーション能力を伸長させる教育活動」としての位置づけを再確認し、あらゆる教育活動の中で生徒の能力の伸長に向けた取組を行っていく。特に、総合的な探究の時間の中で活動を充実させる。                      昨年度のプロジェクトチームから提案された「地域の課題解決力、京都No.1校」を実現すべく、生徒会活動、委員会活動、部活動、総合的な探究の時間等、学校生活のさまざまな場面で地域に開かれた教育活動を展開していく。これら地域をフィールドとした課題解決力の伸長を通してグローバルな問題に挑戦する力を育むという、「北稜人材育成ストーリー」の構築を目指す。                      ・特に本校生にとって学校生活を充実させる大切なステージとなっている学校行事について、「生徒起点」で不断の見直しを進め、生徒の主体的な活動の力を最大限に発揮できる場としていく。                      ・生徒会、生徒委員会の活性化を通して、生徒が主体性を発揮し、挑戦する場としての学校の機能を、より一層強化させる。                      ・本校の強みである部活動について、生徒の主体性の育成と、多様な才能を発揮する挑戦の場としての機能充実を一層進めて行く。                      ・穏やかで落ち着いた生徒が多いという「北稜ならではの魅力」を学校の強みとして再認識し、落ち着いた品格のある学校を目指していく。</p> <p>(2) 北稜学習改革                      ・新学習指導要領の趣旨の実現を通して、「主体的・対話的で深い学び」への授業改革を組織的に行う。                      ・観点別評価の研究と実践を通して、「生徒起点」の学習改革を進めていく。                      ・学びにおけるICTの活用を通して、「協働的な学び」と「個別最適化した学び」の実現をめざす。特に、一人一台端末による学習活動(BYOD)について、家庭学習も含め生徒の学びの全体像を見渡した「生徒起点」での活用を目指していく。                      ・特別支援の観点をもって学習活動を見直し、また、教育的視点の重点をシンパシーからエンパシーへ移行させることを通して、多様な学力、学習経験、学習習慣を持つ生徒一人一人が北稜で「学びの喜び」を経験し、生涯を通して自立した学習者となるよう、学びの体系の再構築を行う。                      ・従来の進路指導の既成概念を超えて、豊かな学習「体験」を通して学びの「方法」を身につけ、自律的に学習する力を育てる、「北稜ならではの進路指導の体系」を構築する。また、生徒が自らの学力の伸長を確実に実感することのできる、受験勉強の仕組を作り上げ、モチベーションを高め、自らの夢を見だし、高みに挑戦する力を育てていく。</p> <p>(3) 北稜の魅力発信                      ・中学生の多様なニーズに対応できるという、本校の豊かな特色ある教育活動について、より幅広い中学生に情報を届けることのできる手段を検討していく。                      ・中学生やその保護者に限らず、本校保護者、地域の方々へより広く本校の教育活動を発信することで、地域に広く愛される学校を目指していく。</p> <p>(4) 北稜教職員体制                      ・「北稜学びのデザインワーキンググループ」を立ち上げ、「入学から卒業までの北稜ならではの学びの体系」検討し、実践に移していく。                      ・学校ICT・ネットワーク担当チームの機能を強化し、校務ICT化・学校ICT化を進めていく。                      ・総合的な探究の時間、地域連携のそれぞれに特設担当主任を設け、持続可能な組織的な取組を計画、実践していく。                      ・教職員が、特別支援の観点、より深く鋭い人権感覚を身につけ、教育活動の充実にあたることのできるよう、校内研修体制を整えていく。</p>

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	最終評価		成果と課題
			項目	総合	
教務部	学びにおけるICTの利活用を通して、「協働的な学び」と「個別最適化した学び」の実現をめざす。	一人一台端末による学習(BYOD)に向け、「ロイロノート」の整備・活用による生徒起点の学習を促す。	A	A	一人一台iPadを持った1年生の講座を中心に、ロイロノートを中心とした授業展開がよく見られるようになった。また、全教職員対象に教科アンケートを実施し、スタディサプリによる課題配信や案内、小テストの実施状況等を整理した。
		校務・学校ICT化に向けた本校の現状・課題を整理し、持続可能な体制を整える。	A		Slackを中心に校内のICTに関するトラブルや課題を情報共有し、対処するようになった。引き続き、教職員や生徒のPC、iPad、ネットワークの整備・調整、アカウント情報の管理等について窓口・担当を整理する必要がある。
教育推進部	北稜の魅力を深め、発信する。	長年の国際理解教育と各国交流の成果と課題を見直し、コロナ禍での新しい国際交流の形を形成していく。また、これまで交流していた学校との連携をとると共に、生徒の国際感覚の醸成を目指す。	A	A	大学の留学生との対面での交流や他国とのオンライン交流の実施、来年度の姉妹校であるマレーシアの高校生の来校に向けての準備など、コロナ後を見据えた国際交流の実施や調整を行えた。国際交流の「全校化」に向けて、全教職員の協力のもと来年度以降の国際交流の準備を進めていく。
		これまでの環境保護活動の成果と課題を整理し、教職員の意見集約を経て、新しい今後の方向性を示す。	A		KES認証の終了により実務作業の軽減を図るとともに、その分を環境教育の充実に向けて行うことができた。とくに北稜探究Ⅰでは、年間を通じて全員に環境教育をテーマとした探究活動を行った。環境保護活動では環境委員会の取り組みや環境アンケートの改善などを実施した。今後は、環境保護活動の内容に生徒のアイデアを取り入れるなど、生徒自身の主体性を活かしていきたい。
生徒指導部	生徒会、生徒委員会の活性化	「地域の課題解決力、京都No1校」を目指し校内での広報活動や、実践、発表に取り組む。	B	B	今年度は校内での広報活動や次年度からの実践に向けて生徒会と話し合いを重ねた。次年度は年度当初から動ける体制作りを行う。
		「北稜祭」「体育祭」などの学校行事において生徒が主体的に活動し、学校生活をより充実させる取り組みにする。	A		「北稜祭」「体育祭」や多くの行事において、今までの形から変化させ、生徒が自ら考え主体的に取り組める形にした。今後も生徒発信の取り組みを充実させていく。
	部活動の機能充実	部活動での活躍を始め、取り組みや成果を発表する場面を定期的に用意する。	B	B	始業式と終業式での、生徒会が成果を発表する形が定着してきた。今後は決まった時だけでなく、ホームページやSNS等を活かして不定期に発表できるようにする。
		キャプテン会議や部集会を定期的に行い、生徒が主体的に部活動に取り組める内容を積極的にすすめる。	A		キャプテン会議を定期的に行い、生徒が主体的に活動できるように声かけを行った。また4年ぶりに部集会を開催。今後も北稜の伝統として継続していく。
進路指導部	「自律的・主体的な学び」を目指した進路指導の体系を構築する。	模擬試験やスタディサプリ等を活用した進路補習を実践し、主体的に学習に取り組める環境を整える。	B	B	主体的な学習の定着を目指した補習「モシサブ」を実践した。問題解説を重視した指導ではなく、学習方法や取り組むべき内容などの教授を重点的に行い、模擬試験後は自身の学習の振り返りを中心に行った。参加した生徒の模擬試験に対する意識の向上を図ることができたが、モシサブの内容や日程などに関して、まだまだ改善する余地がある。
		入試システムや模試の申し込み、進路希望調査などの進路情報をスタディサプリ等を利用して生徒、保護者に発信する。	A		スタディサプリの連絡ツールを活用し、進路に関わる各種申込やアンケートを発信した。こまめに学年部と連携して生徒の受信見逃しや回答期限遅れをださないように工夫した。
保健部	特別支援教育の観点を持った適切な生徒支援に努める。	支援が必要と思われる生徒への対応を通して、校内の教育活動全体を特別支援の観点で見直すターミナルの役割を担う。	B	B	「気づきの支援シート」は、効果的な活用において課題が多く残った。教育相談会議の場を活用して、支援が必要な生徒に関する情報を共有すると共に、教科担当や担任、また学校と家庭との連携の仕方について引き続き探していきたい。
		教職員研修を実施し、ICTを活用した授業のUD化を進める。	B		6月に特別支援教育に関する教職員研修を、2月に授業のUD化に関するミニ研修を実施した。次年度、iPadの利用が2学年に渡るのに併せ、ICTを用いたUD化に関して更に多くの教員に広めていきたい。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	最終評価		成果と課題
			項目	総合	
図書部	生徒起点で魅力ある図書館づくりを行う	定期的な図書紹介や企画展示・教科発表展示を通じて来館者増に努める。端末を利用した教科との連携も意識して取り組む。	B	B	歳時に合わせた企画展示や図書紹介・教科作品の展示などにより来館者増に努めた。一学年の探究学習のはじめに司書による「情報・資料検索の仕方や注意点」のガイダンスを行うなど、支援の方法を講じた。ICT化が進む中で、取組の基礎の段階で紙ベース資料の重要性を問いかける取り組みが必要となってくる。
		図書委員会として校内企画イベントを実施するだけでなく市内・乙訓地域の交流会を通じて得た刺激やノウハウを現場で活かせるように努める。	A		市内・乙訓地域の図書委員会交流会の成功をもとに、北稜祭、秋の図書館フェスティバルに積極的に取組めた。特に北稜祭では図書館内に畳を敷き「和の空間」を提供するなど、居場所としての図書館のあり方を模索した。
事務部	活用しやすく魅力ある学校環境整備を行う	特色ある教育活動をさらに充実できるように校内の情報共有を強化しながら「生徒起点」も含めた様々な視点で学校環境の整備に努め、校内施設全体について更なる改善・整備を図る。	B	B	光熱費高騰の影響で様子を見ながらの予算執行にはなったが、各教科及び分掌の希望に沿えるよう尽力した。また光熱水費高騰の値上げ以外の原因究明により節約に努めた。次年度以降についても特色ある教育活動の充実に努めたい。
第1学年部	学びの喜びを経験し、自立した学習者になるための素地を養う	生徒がICTを利用する回数を増やして、生徒が自ら学び自ら考える習慣や計画的に学習する習慣をつけさせる。	A	A	なつサブ・ふゆサブを実施して、スタサブを利用した学習を定着することができた。キャンパストラベル・韓国調べを通して、ICTを利活用してまとめや発表をすることができた。
	生徒の主体性を育成し、多様な才能を発揮させる	部活動や学校行事に積極的に参加させる。学校行事や委員会では生徒主体で活動する場を増やす。	B		文化祭や体育祭には生徒主体で活動をする機会を増やすことができた。部活動や委員会活動を充実させ、さらに主体的に取り組むことができるような仕掛けを考えていきたい。
第2学年部	1年時に目標とした基本的な生活習慣をさらに充実させ、規範意識を高めて、研修旅行を活用し、中心学年として部活動を含め、高校生活を充実させる。	コロナ禍で制限もあるが、修学旅行を中心とした学校行事にも主体的に取り組ませる。特に、新たな取り組みとして、研修旅行を遠足などの学校行事に連動させ、クラスを超えた学年としての取り組みを充実させる。	A	A	1学期の遠足から研修旅行を見据えたクラスを超えた行動班での活動、北稜祭ではクラス毎の取り組みと学年の取り組みをミックスさせた活動を行った。研修旅行も無事終了し、当初の目標であるクラスを超えた活動形式は十分達成できた。この活動は北稜高校では初めての取り組みであり、今後に向けた第一歩にはなった。
		高校の中心学年として、進路実現に向けた基礎学力の定着や応用力の伸長はもちろん、充実した高校生活を送り達成感を得られるように、部活動や生徒会活動、委員会活動にも積極的に参加させる。	B		進路実現に関して進路指導部と共同で進め、新たな面談週間も活用できた。進路に関するLHRも、研修旅行後には本格的に実施し、生徒に進路の意識付けはできた。ただ、まだ先を見据えた行動にはつながっていない部分もあり、3年の初期につなげていきたい。部活動や委員会活動は活発に動いており、一定の成果はあがっている。
第3学年部	生徒自身が充実した学校生活を送り、進路実現に向け主体的に行動できるようサポートする。	学校行事における生徒自身の満足度を高めつつ、最高学年としての完成度の高い活動ができるよう支援し、充実した学校生活を送らせる。	A	A	北稜祭をはじめとして、生徒自身の主体的な取り組みの中で、自分たちの学校生活を満足なものに作り上げていくことの支援をすることができた。実施時期や進め方には課題はあったが、2月のスポーツ大会は企画運営進行とすべて生徒の手による実施で、非常に満足度の高いものとなった。
		個々の生徒にあわせた適切な指導助言を行い、多様な生徒それぞれの進路実現が達成できるようにする。	A		総合型選抜や学校推薦入試で多くの者が合格し、早期に多くの進路決定者を出したが、一般入試に向けても個々の生徒の進路実現のために進路指導部と連携しながら、細やかな指導を行うことで、バックアップをすることができた。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	最終評価		成果と課題
			項目	総合	
国語科	学びにおけるICTの利活用を通して、「協働的な学び」と「個別最適化した学び」を推進する。	常にBYODを意識し、授業の中でICTを効果的に取り入れていく。ロイロノートなどを利用した生徒の協働的な学びにより、生徒が主体的に参加できる授業形態をさらに工夫する。また、週末課題等でスタディサプリを活用し、生徒一人一人の躓きを解消させ、基礎学力の向上を目指す。	B	B	ICTを積極的かつ効果的に取り入れた授業を展開できた。具体的には、ロイロノートを活用した協働的な学びや、PowerPointや動画などを活用することにより生徒たちの学びを深化させることができた。しかし、スタサブの活用や、生徒自身の能動的学びを十分に引き出せていないと感じているので、どのように主体的な学習者となれるよう導いていくのか、次年度の課題としたい。
	教育活動の柱である「表現活動」を「生徒起点」でより充実感のあるものにする。	小論文模試を通して文章表現の基礎力を養うことはもちろん、今年度は理科と連携し、様々な探究活動を通じて得られた成果をプレゼンテーションするなどして豊かな表現力を育成する。	B		「北稜探究Ⅰ」では理科と連携し、環境問題を取り上げたプレゼンテーションを作成・発表した。生徒自らが「問い」を立て、解決していく道筋を考え、またそれを効果的に表現する手法を学ぶことができた。「北稜探究Ⅱ」においても、志望理由書の作成や面接指導により、自分の考えを他者に分かりやすく伝えるための表現方法を学ばせることができた。
地歴公民科	地域を起点としてグローバルな視野を養う学びを、科目の特性を活かして展開する。	グローバルな地理的・歴史的認識の下、同時代の世界、周辺諸国の動向や関わりに注目しながらの授業展開し、地域社会との関わりの中で、主権者意識を育み、SDGsの目標達成をめざす教育指導を実践する。	B	B	各科目において、地域の防災やSDGsに関わる地球規模の課題のについて生徒たちが考え、表現することができた。
	個別最適化を目指す教材と指導方法の開発に取り組み、課題解決力の向上を推進する。	生徒起点で教材開発や指導方法(視聴覚教材・ICT活用)を開発し推進する。また、地理総合、公共及び「総合的な探究の時間」において課題解決力を向上させる取組を推進する。	B		教科会議において、それぞれの実践や評価の方法を共有し話し合うことができた。スタディサプリの活用についても話し合っているが、まだ有効な活用策は見出せていない。
数学科	新1年生のBYODに絡め、教科全体でのICT活用促進を図る	・ロイロノートを中心に、課題配信、回収機能を用いた授業を展開し、視覚教材も用いながら生徒の理解度を深める授業を実施する。 ・課題をタブレットを通じて提出させることで、生徒と教師間での課題の共有をスムーズにし、未提出生徒への声掛けを的確に行う一助とする。	A	B	各教科担当で、ロイロノートやスタサブを活用し、効果的・効率的に授業展開を行った。課題の配信・回収がスムーズになり、記録を残しやすいメリットが感じられた。
	新しい大学入試に対応できる力を育てる	・思考力・表現力・判断力を伸ばす授業展開を教科会や模擬授業を通して研究し、公開授業および研究授業において実践する。 ・アドバンスクラスをターゲットに、模擬試験の過去問対策を重点的にを行い、入試問題へのアプローチを進める。	B		1年アドバンスクラスを中心に、探究課題や応用問題を積極的に取り入れ、新しい大学入試への対応が一定できた。思考力・表現力を養う手だてが十分とは行かなかった。
理科	自然現象への興味・関心を高め、引きつける授業の実践。	教科書の内容を踏まえ、身近な自然現象や最新の研究などをできるだけ多く例示、紹介して、学習内容が生徒自身に密接に関わっていることを示し、実験、演示、模型、ICT機器等を有効に活用し「引きつける」授業を行う。	A	B	減少傾向にあった実験・実習の実施回数は、例年並みに回復することができた。今後も衛生面に注意し、生徒の不安を解消しながら実験の機会をできるだけ増やしていきたい。また、プロジェクターなどを利用して動画・画像・アニメーションアプリ等の資料提示を工夫して、より実感できる授業の展開に一定の成果があった。デジタル教材の有効利用に関する情報収集や実践に向けた教科内の研修を計画していきたい。
	学習習慣の確立と個に応じた指導の充実。	柱となる重要なポイントを明確にしながらメリハリのついた指導を心がけ、生徒が効率的に学習に取り組めるようにする。学習習慣の確立のため、課題プリント、実験・実習レポート等を定期的に提出させ、小テスト等で達成度を把握すると同時に、スタディサプリを有効に活用して個に応じた学力伸長を図る。	B		特に1年生の学習評価については、課題プリントや実験レポートについて観点別評価につなげることができた。今後、観点別評価がより生徒の取り組み状況を反映し、学習意欲につながる評価になるよう研究は今後も継続的に行っていく。スタディサプリについては、考査前などに視聴する講義を指定するなどの「個に応じた指導」に十分活用できなかった。多くの教材の中で、生徒の到達レベルに応じたものが何かを把握できていないことが課題として残った。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	最終評価		成果と課題
			項目	総合	
保健体育科	「表現活動」に重点をおき生徒同士で課題解決促し学習意欲を高める。	学習カード(ロイロノート)やグループワークで自己の表現力を磨けるよう伝え方、考え方のポイントをアドバイスする。	B	B	ロイロノート活用による画像・映像を貼り付けたレポート作成により創造性や独創性を養い、主体的な深い学びにつなげることができた。しかし、ロイロノートにつなげられる環境が教室のため、身体活動時間の確保に課題が残った。
		ICT機器の活用による運動局面における「外在的フィードバック」及び、生徒自身における「内在的フィードバック」を自己表現し、生徒同士で問題解決できるよう促す。	B		BYODによる外在的フィードバックを行うことにより、授業で目標設定をすることができ、生徒同士で問題解決への協調性を高めることができた。欠席などによる動画の有無などで進行状況に差が出るのが課題である。
芸術科	芸術の幅広い活動を通して、各科目における見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の芸術や芸術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す。	生徒のレポートやアンケートを用いて、目標の設定と振り返りをさせることにより、芸術における諸能力が高まったかどうかを評価させる。	B	B	毎時間または題材ごとの振り返りを行い、生徒自身の成長を評価させて生徒自身が諸能力の高まりを実感することが出来た。
		主体的・対話的で深い学びの実現に向け、ICTやアクティブラーニングを活用した授業を展開する。	B		生徒作品を写真や動画で撮影したものを大型スクリーンで鑑賞したり、DVD鑑賞をしたり、1年生でタブレット端末を使用したり生徒相互の交流とICTを活用した授業を展開した。
英語科	①新学習指導要領に基づいた指導と評価方法の構築 ②「国際理解教育」の中心的な教科として、生徒の学習意欲と学力の向上	①指導方法や評価方法の構築に向けて、教員間で定期的に意見交換を行い、共通理解を図る。	A	A	知識・技能はもちろん思考力・判断力・表現力を高める授業を目指し、教員間で意見交換を行い、共通認識を持って授業を行うことができた。1年生では手紙交換やZoomでの交流などを全クラスで行い、国際交流を充実させることができた。
		②英語検定取得者を増やす。特に、2年終了時まで、アドバンスコースの生徒は準2級、英語コースの生徒は2級取得を目指すよう指導を徹底する。GTECについては、意欲・目標を持って取り組ませ、スコアアップを目指す。2年時には検定版を実施して、オフィシャルスコアを取得させる。	A		英検の受験者数を徐々に増やすことができた。GTECでは、1年生は前年度の1年生と比較し、成績が伸びた。特にリスニングとスピーキングでは各10点伸び、総合点で30点伸びた。2年生のBasicでもリスニングとスピーキングが特に伸び、前年度生と比較して総合点で20点伸びた。
家庭科	自立と共生について様々な視点から考え、行動できる力を養う。	コロナ禍で厳しい現状ではあるが、実験・実習、振り返りレポートなどを活用した主体的な学習を例年以上にとりいれる。	B	B	家庭基礎で40名規模の調理実習はまだ実施できない。来年度、コロナ対策として実習にどのような方針が出るかにより実施できるかもしれない。代わりに被服領域において教室でできる実験などを導入した。
		ICTで視聴覚教材を利用することにより、様々な状況の人々と共に生きている現実を共有する。	B		自分のこととして想像しにくい高齢社会の分野では、ICTを用いて画像を提示することにより様々な状況について考えることが出来た。
情報科	実生活において情報技術を正しく効率的に利用できることを目標とする。	基本的なPC利用・キーボード利用の修得を目指す。情報技術の進歩を体験しながら、ネットワークを意識した利用方法が身につくよう指導する。	B	B	キーボード入力など基本的な技術の習得はほぼ達成できた。ネットワーク利用についても、クラウドサービスを中心に参画態度の重要性を重ねて指導した。プログラミング実習も行った。
学校関係者評価委員会による評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岩倉の地にある唯一の高校として、地域の持つ力を活用し、さらなる地域連携を模索し、「環境教育」「探究活動」と「地域」を関連させることで、豊かな学びにつながることを期待できる。</li> <li>・文化祭の取組に象徴されるように、生徒起点で学校生活を充実させていくことができ、学校評価アンケート項目の7割以上で過去最高値を示しており、コロナ禍を経た結果として評価できる。</li> <li>・学びのICT化が進み、民間のクラウドサービスや模擬試験を活用した新たな進路指導の取組が、個別最適化学習の実現につながり、成果をあげている。</li> <li>・ダイバシティ&amp;インクルージョンを人権教育の目的の一つとしてを捉え、特別支援の観点から教育活動を見直していく必要がある。</li> </ul>				
次年度に向けた改善の方向性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「京都岩倉に国際の北校あり」と認知される学校へ。</li> <li>・「学びの喜び」を体験し、「自立した学習者」へと育つ学校へ。</li> <li>・多様性の中で主体的に、自立して生きる、「品格ある北校生」が育つ学校へ。</li> </ul>				